

四人の兵隊

長谷川時雨

青空文庫

出征文人の一員、林芙美子のリュックサツクのなかへはいつて、わたしの心持も行くといふと奇矯にきこえるが、わたくしの兵隊さん慰問文が、おぶつていつてもらふことになった。思ひがけない嬉しさなので、どうしてもそのことから書かなければ氣がすまない。

芙美子は電話で優しくいつてくれた。五通ばかりお書きなさい。よい場處へ、畫鋏で貼つて來てあげます。

それをきいた時の感は、迦陵頻伽がりようびんがの聲とは、かうもあらうかと忝けなかつた。含みのある、美しき情なさけに富んだ聲音こはね——きくうちに、わたしの心は、花が開くときもまたかうもあらうかと思ふ、

やは
和らぎにみたされた。

—— 好い娘こをもつた。

そんなふうにはホク／＼した。こども娘といつてわるければ、優しい姪がいつてくれるやうな、ポタ／＼した、滋味のしたたるやうな嬉しさだ。翼の強い若鳥が、木の實をついばんで來てくれるのを、好い氣になつて孝養をうけてゐるやうな有難いものだつた。

あたしは幸しあはせ福ものだ、おもひまうけない戦地へ、前線へ、慰問の手紙をもつていつてもらへる。そして、それが、多くの兵隊さんの目に觸れるやうにしてもらへる——

あたしの心は嬉しさに濡れてゐる。戦場には、やはり、子とも兄弟とも、甥とも思ふ人たちがばかりで一ぱいだ。そこへ、あたし

の慰問文が貼つてもらへるのだ。なんと書かうかと、幼児にかへつたやうに、そればかり考へてゐる。

幼少のをり、何處か、よいところへ連れて行かれようとする、傍^{はた}の者が、おつむ（頭）に乗つて行かうだの、おせなにくつついて行かうの、たんも（袂）へはいつて一緒に行かうかな、などといったことまで思ひ出して、慰問文は、小學生の作文のやうに書きたいと、いそいそしてゐる。

にこにこしてゐる日は、にこにこすることが重なるもので、重い慰問袋をぶらさげて、森茉莉さんがニコニコしながらはいつて來ていふには、

こしらへてゐるうちに、こんなにに入れてしまひましたの。なん

だか、この袋を貰つた兵隊さん、一番つまらないかと、さう思つて詰めてゐるうちに、こんどは、この袋に當つた人、一番幸^{あはせ}福^{あはせ}なんぢやないかと思つたりして――

と、いみじくもいつて、なごやかに笑つてゐる。茉莉さんは鵜外先生のお嬢さんで、小堀杏奴さんの姉さんで、可愛い人だ。文壇女流のみなさんから、「輝ク」へよせられる、皇軍將士への慰問袋が、日に日にうづたかく重なつてゆくのも、なんともいへず嬉しい。

あたくしは今まで、兄弟にも親戚にも、一家から一人の兵士も出してゐないので、肩身がせまかつた。冬の土砂降りの日など、自分は自動車に乗つて、つぶぬれの兵隊の列に行きあつたりする

となんとも濟まなくてしかたがなかつたが、そのあたくしが、自分
は生みもしないくせに、四人もの兵隊を、急に甥たちにもつこ
とになつた。

四人の兵隊は、みんな一人づつ、妹^{きやうだい}弟の子で、三人が三人
の妹の、一人は弟の息子。一人の妹が二人の男の子をもつだけで、
どうしたとかあとはみんな一粒だねである。

二人の男の子をもつ妹は、海軍軍人に縁づいて、早くから未亡
人になつてゐたが、上の方の子は少年の時から、船のおもちやば
かり造つてゐて、帝大工科在學中に機關中尉になり、今時局に、
幾分の御奉公をいたすのに間にあつた。下の方の子は南洋へいつ
て、南洋開拓の些少の土持ちをしてゐる。

その次の妹は、獨り娘にもらつた養子が豫備少尉で、事變應召に勇んで出たのをはじめにして、つい兩三日前、すぐ下の妹の息子と、わたくしが預かつて、赤ん坊の時から育ててゐた、弟の子が、おなじ隊へはいつた。

これもつい先日、大尉に昇進した海軍の方のは別として、陸軍の兵隊に出た三人のうち、二人は帝大出、手許のが早大出だが、おなじ隊へはいつた二人と、南洋へいつてゐるのが同年、氣質は異つてゐるが、仲が好い。

最近入隊した方の甥の一人は、おとなしい男で、教育學を専攻にして、コツコツとやつてゐたが、兵隊になる感想をきくと、インテリは大衆から浮いてゐるから、僕はみんなとほんとに一緒に

なれることを、よろこんでゐますといった。

この子が少年のころ、親たちが北京に居たので、私の手許にも居たことがあるので、人混みの中などでは、眞つ赤に逆^の上せ、一たいにデリカな性質なのを知つてゐるので、私の方が案じてゐたのだが、彼は考へ深くさう答へた。

この優しい氣持のひとり息子は、皮膚も人並より弱いので、彼の母親は、先達てからしきりに太陽燈をかけさせてゐた。外科の博士である彼の父は、健康増進の注射を、毎晩手づからしてやつてゐた。兵隊になつたら強く——國を辱しめるな、といふのが、何處の親にも共通した心持であらうが、親々の氣持は複雑であらう。

あたしはまた、預つた甥が、病弱な母の體から生れ來て、生後六十日目に、腸捻轉をしたりして、不思議に助かりはしたが、ありとある病氣といふ病氣に、抵抗力のなかつた彼が、元氣な、ガツシリとした體となつて、非常時の今日、國を守る兵の一人となつてくれた、その廿五年間を飛越して、早く死歿^{なくな}つた彼の若い母が、彼を生んだとき私の手を握つて、しぼるやうに陣痛をこらへたので、あたしの中指にはめた指輪がまがつて、指と指の間にはさまり、ダイヤが次の指の肉に喰込んでしまつた痛みを、ふと思ひ出しもするのだつた。

若い母親が、これ一ツを残すために生れて來たやうな、短い一生涯を果すと、わたくしは、わたくしの手に残された、弱い子の

行末までも思ひふけたものだ。彼が二ツ三ツのをり（たしか青島が陥ちた時）ある日私は車の上で、この病弱な幼児もいつか戦があればと、軽い子を持上げて見たが、人世、すべてが戦場、鐵砲玉ばかりが怖いものではないと、心で呟いた。

その觀念が、彼を入隊させる日まで續いてゐたことをたしかめて、私は妹を見ると、その自^{じやく}若たるに安心した。そして、何處の家も、兵士を出すうちの母の心の、堪へしのぶ強さ、けなげさを思ひやるばかりだ。いまも心に叫ぶのは、人々よ、母をいたはれといふこと、戦線に送る慰問袋は、故國日本の母をも悦ばすであらうといふことである。

青空文庫情報

底本：「隨筆 きもの」實業之日本社

1939（昭和14）年10月20日発行

1939（昭和14）年11月7日5版

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2009年1月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

四人の兵隊

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>